

輝 跡 III

竜王北中

3学年通信第号

平成30年9月13日

文責 風間哲郎

紫龍祭特集～感動の2日間

9月7・8日の2日間に渡って、第27回紫龍祭が開催されました。

1日目の文化部門では、どの学年も素晴らしい演劇、そして合唱を披露しました。その中で3年は「杉原千畝一命のビザ」を上演しました。

これまで私たち青学年は、歴史に題材を求めた2つの劇を上演してきました。1年の『信長の禁制(きんぜい)』は地元の慈照寺に伝わる「禁制」から着想を得た創作劇、2年『浅川巧物語』では、郷土の偉人、浅川巧の生涯を伝えました。そして今年はさらに視野を広げ、第2次大戦で迫害を受けたユダヤ人を救った1人の外交官『杉原千畝(ちうね)』に光を当てました。

3つの劇に共通するテーマは何でしょう。私(風間)の個人的な意見ですが、それは「今、目の前に生きている人を救いたいという、純粋な思いを貫いた人間」を描くことだったと思います。彼らはどのような非難を受けようとも、自分自身の、時には家族の命さえ危険にさらそうとも、無辜(むこ)の民※を救いたいという純粋な気持ちから行動します。浅川巧は、さらに朝鮮の優れた文化を残したいという夢も持ち続けました。浅川巧も杉原千畝も、今でこそ功績が評価され、スポットが当たりつつありますが、生前は不遇な人生を送っています。1年の「隆室俊興」に至っては、ほとんど誰もその事績をたどったことすらない人物です。私たち青学年は、このような歴史に埋もれつつあった人物を描くことを通して、身分、民族、人種を越えて、今そこに生きている人の命の大切さを訴え、信念を貫くことの気高さを表現したかった。

※無辜(むこ)の民=無辜は身にやましい点がないこと。無辜の民とは、たまたまその時代に生まれ合わせたため、戦争などで被害を被った人々のこと。

今3年間を振り返る中で、3年生一人ひとり、今年の上演をどのように評価するでしょうか。私は、まさに集大成の演劇だったと実感しています。キャストの演技はもちろんですが、どの係りも妥協することなく、時間と技量の許す限りよいものを創るため力を結集できたのではないのでしょうか。思いつくままに書けば、寛道さんの最後の「今、私は幸せになりました」のセリフの間、ナチスの将校の軍服の細部へのこだわり、スライドとナレーションのタイミングの調整など挙げれば切りがありません。まさに3年全員で創り上げた演劇であったと言えます。最後の合唱は、そのやりきったという充実感が皆さんの表情に表



れた合唱でした。

そういえば、忘れてならないのは『聞こえる』という合唱と演劇との関連です。『聞こえる』は「ベルリンの壁崩壊」「森林伐採」「原油流出」「天安門事件」など激動の時代を取り上げ、「何もできない自分」しかし「何かに関わっていきたい自分」の思いを表現した歌詞です。私たちは、「杉原千畝」にはなれないかもしれませんが、しかし、この予測不能な激動の時代から目を背けることなく、自分なりに生きていきたいという思いが詰まった合唱なのだと思います。

このように、合唱も含めた総体として観客に、いや自分自身に送るメッセージを発信するという今回の演劇は、まさに中学3年間の集大成であったと言えるでしょう。

その他、おおいに盛り上がった吹奏楽の演奏、MCを務めてくれた3人や飛び入り？出演者も含め、自分たちの紫龍祭を楽しむ、そして楽しませる姿は3年の持つパワーを見事に体現していました。思い出に残る文化部門となりました。

2日目の体育部門でも3年生はこれまでとは違った新しい自分を見せてくれました。長縄から始まった熱戦は、最後のムカデまで絶えることはありませんでした。特に長縄やムカデはさすが3年といえる白熱の闘いでした。しかし、そうした競技だけでなく、下級生をリードし、互いに励まし合う姿に3年生の成長を実感することができました。

ブロックのリーダーは、どうしたら自分のブロックを盛り上げられるか、様々に悩んだと思います。これまでは責任者に押しつけてそれで終わりということが、ままありました。しかし、今年は応援歌や



応援の振り付けなどみんなでアイデアを出し合って、3年生全員で盛り上げていこう、下級生を引っ張っていこうという気持ちがとてもよく伝わってきました。本番はもちろんですが、ブロック練習のときからそれぞれのブロックが、応援練習や各種目の練習方法を自分たちなりに工夫していました。

それは、ブロック練習だけではありません。学年の体育練習の時も、ただ練習するのではなく、練習中はもちろん、練習の最後には反省会を開き、どうすればもっとよくなるか、何回も話し合いを重ねていました。それを見事に表したのが最後のムカデの大接戦ではなかったでしょうか。勝者と敗者を超え、互いに讃え合うにふさわしい体育部門でした。

この2日間を全力で駆け抜け、閉祭式での生徒会長の「閉祭宣言」とカウントダウンのコールは、生徒会本部の、いや全校生徒の「やりきったなあ」という充実感に満たされた最高の場面だったと思います。

こうして、素晴らしい2日間を手にした訳ですが、今皆さんの心には何が去来しているのでしょうか。3年職員みんなが、この2日間、いやそこに行き着くまでの取り組みを、単なる思い出に終わらせるのではなく、一人ひとりが自己の成長の糧とできるよう願っています。進路決定に至るまでに訪れるであろう幾つもの壁を乗り越えること、人間関係での悩みを克服すること、様々な場面でこの紫龍祭で得た何か皆さんを支え、導いてくれると私たちは信じています。仲間と築いたこの宝を単にアルバムのページに貼り付けるのではなく、自分自身を奮い立たせるために使ってください。3年間で得た力はそれに値するものです。自分を信じ、仲間を信じ支え合って、卒業までの半年間がこれまで以上に素晴らしいものとなるよう、邁進していきましょう。お疲れ様でした。

